

地域と大学の連携

—実践的授業の試み—

寺島雅隆

Cooperation of the Region and a College

- The Trial of a Practical Classwork -

Masataka Terashima

キーワード：実践的授業 practical classwork、社会起業家 social entrepreneur、
起業家教育 entrepreneurship education

1. はじめに

地域に立脚する大学において、どのように地域連携をしていくのか、それは地域と大学に課せられた課題のひとつであるといえる¹⁾。本学（愛知学泉短期大学）においても、「庶民性と先見性」という建学の精神を掲げ、学問と教育を地域の人々と地域社会に還元することを目的としている²⁾。また、本学は経済産業省が推奨する「社会人基礎力³⁾」に立脚し、教育カリキュラムを推進している。そして経済産業省は「社会人基礎力」育成にあたり、教員の一方的な座学ではなく、PBL（Project Based Learning：課題解決型学習）を重視している⁴⁾。

地域と連携し、いかに実践的な教育を行うかは、本学においても重要な課題であることが認識できる⁵⁾。また学生側からの観点においても、筆者が行った調査から、「正しい答えを教えられる教育よりも、自分で答えを見つける教育が重要である」という設問に対し、73%が肯定している⁶⁾。つまり、答えを一方的に伝達する講義を中心とする授業よりも、主体的に答えを見出していく教育を要望していることが理解できる。

では、具体的にどのような地域と連携した実践的な教育が可能なのであろうか。それは大きく分けて、教員の働きかけによる場合と、社会制度を利用する場合と、地域による働きかけの場合が考えられる。筆者は2009年4月より本学「生活デザイン総合学科」に赴任し、「ビジネススタディユニット⁷⁾」を中心とするビジネス系の授業を担当してきた。その中で、実際に行ってきた授業を取り上げ、その地域連携を実践的に行ってきた経緯と結果を述べる。

2. 教員の働きかけによる地域連携

1) 「企業と社会」授業による企業人の授業参加
「企業と社会」は前期の選択授業の一つである。生活デザイン総合学科の「情報・オフィスフィールド」の中の「ビジネススタディユニット」に属する授業である⁸⁾。講義タイプの2単位の授業であり、100名弱程が受講する。

この授業の目的として挙げているのは下記の4点である。①社会人に必要とされるものがないかを理解する。②企業が継続するためには何が必要かを知る。③社会ルールやモラルについ

て、その仕組みを理解する。④日本文化について多面的に分析し、客観視できるようにする。そのために、本学川口直子教授との共著によるテキスト『これだけ知っ得！ 身につけ得！—企業が求める常識とマナー』⁹⁾を用い、企業の目的・会社制度・社会制度・法律や社会ルール・社会文化等を学ぶ。

また、本学のシラバスはすべて「社会人基礎力」を培うことを目的としており、その授業内容が「社会人基礎力」の12の能力要素¹⁰⁾のうち何を育成するものかを明記している。「企業と社会」の場合は、下記の4点に対して、それぞれの能力要素を育成することを目的としている。
①実際の企業人へのインタビュー調査を行う…『主体性』『働きかけ力』『実行力』。②企業継続のために必要なことを理解する…『課題発見力』『創造力』『情況把握力』。③社会ルール・モラルの背景を理解する…『規律性』『ストレスコントロール力』。④日本文化の歴史や背景を理解する…『発信力』『傾聴力』『柔軟性』。

上記の目的を認識し、具体的カリキュラムとしてこの授業の中心にあるのが、企業に働く人（企業人）に対する取材・インタビューである。その取材・インタビューの命題は、企業が何の目的で存在しているかという問いであり、学生自らが企業人にアポイントを取り、赴いて取材・インタビューを行い、授業内で発表するとともにレポートを提出する。このカリキュラムを導入した動機は、企業は理念やミッションを掲げて社会貢献するものであるということを直に認識させるためである。多くの学生は企業の第一目的は利益であると考えているのだが、地域にあるトヨタ自動車をはじめ、多くの企業は利益を第一にすると明言することはない。トヨタ自動車には創業以来「豊田綱領¹¹⁾」が存在し、現代においてもその精神は引き継がれている。就職を目指す短大生たちは、2年間の在籍期間の早い段階でどのような企業に就職し、どのような仕事をしていくかという問題に答えを出さねばならない。企業を単なる知名度や規模等で選択するのではなく、理念やミッションに共感し、真に社会貢献している企業を見出すことも重要な観点の一つである。それによって、ミスマッチを防ぎ、長期的な雇用の可能性も高まる

と考えられる。そのためには、ホームページや会社案内という表面的な知覚ではなく、実際的で現実的な感覚を自ら体感し、自分に向いている企業かどうかを選別する能力を培う必要がある。

具体的には、学生は3人から5人のチームを編成し、その企業の事業内容と共に、理念やミッションの取材・インタビューを行う。その企業は両親や親類の勤める企業もあれば、アルバイト先の企業である場合もある。中には、街中の商店に飛び込みで取材を行う学生たちも存在する。大学及び授業の名前を出して、地域と関わらせることになるので、そのために必要な礼儀や態度を含めた注意事項について指導を行っている。また、取材で知りえた企業秘密等は口外しないよう促した。当然、その企業に対する誹謗中傷も厳禁であることを理解させた。企業側には履修生の前で取材・インタビュー内容を発表することを事前に了解していただくよう学生を通じて伝えた。

このように学生が地域の企業人との交流を得て、地域と連携すること以上に、この科目において行っているのは、その企業人を授業に参画させる試みである。学生自身が交渉し、理念やミッションを中心に事業内容や短大生へのメッセージなどを授業に参加して話してくださる機会を設けることを行っている。その企業人が本学までかかった交通費については筆者が負担すると学生に伝えた。交渉に成功した学生は発表がない分、企業人と連絡を取り、授業の前後で接客を行い、失礼のない対応をするという学びの機会が与えられた。そしてその話を傾聴し、他の学生と同様、レポートをまとめる課題がある。そのような中、2009年度には下記の企業人が参加した。

- ①株式会社ミズプラ「おいでんの湯」 浅野真 式支配人
 - ②伸技工業株式会社 山田泰博社長
 - ③有限会社ユナイテッドリアラス 石川秀樹 社長
 - ④株式会社ハンズ 長島宏社長
 - ⑤株式会社オリバー 二橋章介営業所長
 - ⑥株式会社ノエビア 浅倉隆志営業課長
- 2010年度には下記の企業人が参加した。

①株式会社オリバー 本店第二営業所 村田悠輔所員

②お好み焼きダイニングとんぼり 佐藤洋店主

③株式会社味くりげ 石井宗太社長

授業(90分)の構成としては、交渉した学生が5分程で企業人の紹介をし、企業人による20分程の講義の後、学生と討議を行い、学生が参画する授業形態を心がけた。学生は学友が連れてきた企業人による、大学教員とは異なる話に真剣に耳を傾けた。学生自身が授業を作り上げ、企業人に興味を持って質問することによって、自らどう仕事をしていくか、どう生きていくかという問いに対して向き合う機会を得たと考えられる。この授業は、学生が毎回、筆者が設置したインターネット掲示板¹²⁾に、①何を授業から学んだか、②それを今後どう生かすか、に関して実名を明記して書き込み、公開を行っている。そこから判断するに、企業人参加の授業効果は高いことが実感できた。

筆者としては、講義料の予算がない中で、いかに地域と連携し、企業人と実際的に関わることか考えた末のカリキュラムであった。このカリキュラムにおいて、何よりも学生が進んで企業人を招き、企業人も快く無償にて参画いただいたことにより、教育の可能性は無限であると認識することができた。

2)「起業・経営演習」授業による起業家インタビューとホームページ公開

「起業・経営演習」は「企業と社会」と同様、「ビジネススタディユニット」に属する授業である。演習タイプの1単位の選択授業であり、50名弱程が受講する。

この授業の目的として挙げているのは下記の4点である。①起業の手法を学ぶ。②起業家精神の必要性を認識する。③資金繰りを中心に、経営手法について学ぶ。④具体的なビジネスモデルを考案し、プレゼンする力を養う。起業を考えるレベルは、セレクトショップの経営者を想定しており、職業選択の一つとして起業を考えるための機会として位置付けている。また、雇用されるにしろ起業家精神が必要とされる時代背景を認識するとともに、どのように楽しく

かつ生き生きと仕事をしていくのか考えることを重視している。

「社会人基礎力」については、下記の4点に対して、それぞれの能力要素を育成することを目的としている。①社会参画する主体性と積極性を育む…『主体性』『働きかけ力』。②キャリアプランの中に起業も視野に入れる考えを培う…『実行力』『計画力』。③起業および経営手法を学ぶ…『課題発見力』『状況把握力』。④自らビジネスモデルを考案し、発表を行う…『創造力』『発信力』。

上記の目的を認識し、具体的カリキュラムとしてこの授業の中心にあるのが、起業家に直に接する「起業家インタビュー」である。そのインタビューの命題は、起業経緯を聞き、あとは自由に質問することである。具体的な質問としては、仕事の大変さや面白さを聞いたり、大切にしていることや座右の銘などを聞くことを勧めている。そして色紙に座右の銘とサインを書いてもらう。学生自らが起業家にアポイントを取り、赴いてインタビューを行い、授業内で発表するとともにホームページとして編集し、起業家にレイアウトや文章を校正してもらい、許可の後に公開する。このカリキュラムを導入した動機は、起業という働き方に実際に触れる機会を与えることであり、起業家の働き方や生き方に対する理解を通じて、自らが仕事に対して何を求め、どのように生きていくかを模索させることにある。

具体的には、学生は3人から5人のチームを編成し、起業家を見出し、アポイントを取り、インタビューを行う。個人事業主を考慮すれば、身近に対象は多く存在するのであるが、見つからない場合は筆者が知る起業家を紹介した。「企業と社会」同様、大学及び授業の名前を出して、地域と関わらせることになるので、同じように事前指導を行っている。

ホームページは、本学オフィシャルサイトの筆者のトップページ¹³⁾にリンクを張っている。2009年度は下記の起業家インタビュー(16名)を掲載した。

①ネットイヤーグループ株式会社 石黒不二代代表取締役社長

②プレザントルーム 中倉典之代表

- ③株式会社ナビット 福井泰代代表取締役社長
- ④美容室オンリー・ガッツ 村田裕俊代表
- ⑤家庭菜園アドバイザー 安藤源代表
- ⑥MSDダンススタジオ 三浦雅子代表
- ⑦株式会社hands 牧田泰彦店長
- ⑧有限会社豆蔵 柴田貴幸代表取締役社長
- ⑨小野玉川堂 小野登代表
- ⑩Cafe まんさく 久田利久代表
- ⑪NPO 法人おいでん 安本和外理事長
- ⑫和光アルミニウム株式会社 小笠原利徳代表取締役社長
- ⑬伸技工業株式会社 山田泰博代表取締役社長
- ⑭スローフードグレック 高林ゆかり代表
- ⑮有限会社ユナイテッドリアラス 石川秀樹代表取締役社長
- ⑯Bar&Dining Lazo 渡邊智之代表
また、2010年度は下記の起業家インタビュー(20名)を掲載した。
- ①株式会社オウケイウェイヴ 兼元謙任代表取締役社長
- ②有限会社竹谷 竹谷聡代表取締役社長
- ③株式会社メイン 山尾百合子代表取締役社長
- ④大岡自動車钣金 大岡清武代表
- ⑤EarthFoodCafe 木下誠店主
- ⑥地魚・豆富料理みくら 名倉隆代表
- ⑦名物屋本舗 稲吉 重二代表
- ⑧株式会社安城自動車学校 石原慧子代表取締役社長
- ⑨株式会社明和コート 奥村優治代表取締役社長
- ⑩株式会社味くりげ 石井宗太代表取締役社長
- ⑪ノエビア岡崎南販売会社 関広子代表取締役社長
- ⑫福祉工房あいち 加藤源重代表
- ⑬お好み焼きダイニングとんぼり 佐藤洋店主
- ⑭イラストレーター 桜井ひとみ代表
- ⑮株式会社フジタ美建 藤田広代表取締役社長
- ⑯株式会社アビバ 沖直美営業所長

⑰Lush japan 間下ゆかり氏代表

⑱大須の洋服屋 小古本真由代表 小寺茂雄代表 寺西儀高代表

発表とホームページの公開を通じて、学生は業種も経歴も異なる起業家が学生に何を伝えたかという共通の項目を見出すことができた。それは、継続的に努力をし、人や社会に貢献する精神を培うことが重要であるという点である。利益を出さねば、明日の生活さえまならない起業家の現状においてすら、利益のために人や社会を欺くことを考えもせず、誠実で真つ当な生き方をしている起業家の仕事観や人生観は、学生に大いに影響を与えたと考えている。そしてこの授業も「企業と社会」と同様、学生は毎回、筆者が設置したインターネット掲示板¹⁴⁾に、①何を授業から学んだか、②それを今後どう生かすか、に関して実名を明記して書き込み、公開を行っている。そこから判断するに、この取り組みにおける授業効果は高いことが実感できた。

筆者としては、学生には負担の多いカリキュラムだと考えているが、最後まで履修したすべての学生がこのカリキュラムを経験してホームページを公開している。現代の学生を意欲や向上心が欠如しがちだと否定するのではなく、いかにして学びに興味と意味を持たせるかは教員側の姿勢にあることを痛感した。そして起業家は、学生の要求に純粋に応じてくれることが多いことを実感し、地域社会と連携した教育は大いに可能性があることを認識した。

3. 社会制度を利用することによる地域連携

教員の働きかけによる地域連携は、入念な下準備と学生を能動的に取り組みさせる工夫が必要である。しかしながら、様々な社会制度を利用することによって、労力と予算をそれほど意識することなく効果的な教育は可能だと考えている。

筆者が2009年度および2010年度に利用した社会制度は、「大学・大学院起業家教育推進ネットワーク¹⁵⁾」によるもので、外部講師を無料で招聘するものであった。大学における起業家教育の一環であるので、それを利用することができるのは大学が短期大学であり、しかも起業に

関する授業名および内容である必要があり、「起業・経営演習」に対して、その制度を利用した。各年度に2人の著名な外部講師を迎えることができた。下記の記述は「大学・大学院起業家教育推進ネットワーク」においてインターネット上¹⁶⁾で公開されているものである。

①外部講師名：株式会社ナビット 福井泰代 代表取締役

- ・日時:2009年10月30日(金) 9:15~10:45
- ・講義タイトル:「ウーマンキャリアクリエイト」
- ・講義の内容:
主婦から発明家となった経緯、そして発明したものを紹介頂きました。その際、発明のコツおよび利益にする方法も詳しく聞かせて頂きました。次に不便さを感じ、「のりかえ便利マップ」を作る中の苦労やご家族の協力等をお聞かせ頂きました。その中で、発明から起業家へのきっかけや、好きな事を仕事にしていく生き方を学ぶ事ができました。最後は「人間の能力に限界はない」とお言葉をいただきました。

- ・学生の反応、本プログラムが有益であった点: 学生の生のコメントです。「お話を聞くことができるともよかったです。福井さんのチャレンジ精神の強さに感動致しました。私も常にアンテナを張って、様々なことに気づき、挑戦できるような人になりたいと思いました。」「のりかえ便利マップを作ったのが、普通の主婦で、誰の手も借りずにたった一人で作り上げた事にもビックリしました。何回も会社に行って断られてもあきらめず、逆に言われた意見などを参考にして凄いなと思いました。ステキな女性の良い話が聞けて良かったです。」

②外部講師名：ネットイヤーグループ株式会社 石黒不二代 代表取締役社長 兼 CEO

- ・日時:2009年11月13日(金) 9:15~10:45
- ・講義タイトル:「起業はリスクの少ない職業である」
- ・講義の内容:
会社の概要をご説明され、インターネットとマーケティングの重要性を教えてくださいまし

た。消費行動の仕組みや広告宣伝の手法を具体的に学びました。そして大学を卒業してからのキャリアにおける選択において、幼子を抱えての渡米、米国での起業という選択をリスクの少ないものとして考えて行動した理由と意味を理解しました。日本と米国の失敗を許容する文化の違いと、失敗してもチャレンジする大事さを学生は実感しました。

- ・学生の反応、本プログラムが有益であった点: 学生のコメントです。「アメリカンだった、おもしろかった！ 起業家カッコイイと思った！」「自分もいずれは起業したいと考えているので、色々な言葉が身にしみた。」「失敗しても何度もチャレンジして成功するのだと思いました。そして努力が必要なんですね。」「とても素晴らしい講話でした。自分が本当に好きな事を見つけることが大事ですね。」「女性の生き方としてあこがれの存在だと思った。キレイだし、生き方もカッコイイし、石黒さんステキです。」

③外部講師名：株式会社オウケイウェイブ 兼元 謙任 代表取締役社長

- ・日時:2010年10月13日(水)13:15~14:45
- ・講義タイトル:「生き生きと働くためには、その会社の選び方」
- ・講義の内容:
兼元様の生き方は、もう一人の自分を育てることから始まっていました。それには魔法の言葉をかけることが必要でした。その具体的な使い方や活用法をお教えいただきました。加えて、限定的であっても目的を明確にすることの重要性を学びました。オウケイウェイブの事業は、兼元様の辛かった幼少時代に原点があり、その種が花開いた今、世界が国境や文化や言語を越え、互いに幸福につながっていく壮大なイメージの中にあることを共感・共有することができました。そして、バタフライエフェクトを一人一人が担う責任を認識しました。

- ・学生の反応、本プログラムが有益であった点: 学生のコメントです。「兼元さんの話を聞いて、今日から自分が変われそうです」「今まで、どうせ一人じゃ何も変えられないし、とか考え

ていたけど、挑戦してみようと思いました」
 「今日のことを家族や友人、たくさんの人に話したくて仕方ありません」「この話を聞いてから、いろんな人に話をしたら、みんな『その人すごいね』って言ってました」「本当に兼元さんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました」「企業の社長ということで、その企業の話をするのかと思っていましたが、そんなことよりもっと大切なことを教わりました」

④外部講師名：株式会社メイン 山尾百合子 代表取締役

- ・日時:2010年12月1日(水) 13:15~14:45
- ・講義タイトル:「働く女性としての生き方」
- ・講義の内容:
 山尾様の起業経緯および考え方を学ぶことができました。芸能関係のお仕事、大企業でのお仕事、30歳で起業されてからのこと、そのご経験は意味深く、今の仕事かどのようなものかを理解することができました。そしてCDデビューされた持ち歌まで披露していただけました。その明るく素晴らしい人格と人間性に学生たちは魅了されました。
- ・学生の反応、本プログラムが有益であった点: 学生のコメントです。「人に興味を持つ、生モノだから面白いというお言葉に共感しました」「人生は一度きりだから、一瞬一瞬を大切にし、自分で人生を切り開いていかなくてはと思いました」「人生は一度きりだから、悔いの残らない人生を送りたいと思います」
 「山尾社長が社員を大切にされていることがわかりました」「山尾社長のように生き生きとして、いろんな事に取り組んで、素敵な女性になりたいと思いました」「何にしても、まずはやってみないと何も始まらないし、道は開けないのだということを感じました」「お話を聞いて、人と人のかかわりをととても大切にしていらっしゃるんだなと思った」「大変なことがあるから楽しくなる、苦しいから大切なものが見えてくるというお言葉を大切にします」「有名企業に就職したからといって、必ずそこで自分が幸せになるとは限らないという言葉が印象的です」

株式会社ナビット福井泰代表取締役は、マスメディアでよく取り上げられている主婦から起業家となった方である。ネットイヤーグループ株式会社は上場企業であり、愛知県一宮市出身の石黒不二代代表取締役社長兼 CEO は、日経ウーマン(日経 BP 社)が主催する「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2009」リーダー部門1位・総合2位を受賞している。株式会社オウケイウェイブは上場企業であり、愛知県名古屋出身の兼元謙任代表取締役社長はホームレスから上場企業社長となったことでテレビ東京系列の「経済ドキュメンタリードラマ ルビコンの決断」でも特集されている。株式会社メイン山尾百合子代表取締役は、アイドル歌手出身で現在、人財教育を行っている。これらの人選は筆者が行い、タイトルについても筆者が提案し、講演者と協議した結果である。こういった著名人による講演は、メッセージ性が強く、学生達の人生観や価値観を大いに刺激した。講演者は社会貢献を第一とされ、薄謝にて講演を受けている。大学や学生にとっても、無料でこういった質の高い外部講師を招くことができたのは非常に有益であったといつてよい。今回の社会制度利用は、本学学生の通学圏内の出身者が含まれているとはいえ、地域連携とよべるものではない。しかしながら、今後、地域連携を主目的とした制度が設定されたのであれば積極的に利用していきたい。

4. 地域の働きかけによる大学連携

1) 「NPO 法人おいでん」の法人設立経緯

地域からの働きかけの場合、その主体は地方自治体・地域企業・地域の NPO 法人等が考えられる。以下、NPO 法人による働きかけの実例を述べる。

先に「企業と社会」の取り組みを述べたが、2009年6月に株式会社ミズプラ「おいでんの湯」浅野真式支配人が授業に参加した。株式会社ミズプラは愛知春日井市に本社がある総合水処理会社で、濾過装置を中心に施行実績があり¹⁷⁾、愛知県豊田市において「おいでんの湯」という名称のスーパー銭湯を経営している。その経営者である浅野真式支配人は愛知県豊田市の大きな祭りの一つである「おいでんまつり」に

関心があった。そのまつりは豊田市が主催して開催されているのだが、住民による主催が理想であるという考えの下、地域活性化のために組織を立ち上げていこうと、柴田恭三代表取締役社長の理解もあり「おいでんの湯」において2009年7月から毎週木曜日に会合が開かれるようになった。筆者含め、地元の有志が集まり、収益の問題や、どのような組織体とするかなどについて話し合いが行われた。

そもそも「おいでん」とは愛知県三河地区の方言で「いらっしゃい」を意味する。「おいでんまつり」は、1968年から始まり、当初は「豊田まつり」と呼称された。豊田市にはトヨタ自動車という大企業があり、日本全国から就業のために訪れるため、「豊田まつり」は「新旧市民の融合と、郷土意識の向上を目的¹⁸⁾」に開催されるようになった。その後、1989年に「豊田おいでんまつり」に改名し、住民の参加拡大を図ってきた¹⁹⁾。「おいでんまつり」は橋本舞子さんが歌った豊田ご当地ソング²⁰⁾に振り付けをして踊るものであり、民謡バージョンやディスコバージョンが存在する。これらの定型の踊りは小中学校でも教えられているため、豊田で育った人々の多くは踊ることができる。

現在のまつりのスタイルは、「マイタウンおいでん」と「おいでんファイナル」の2本立てで構成されており、2011年の場合、前者は15ヶ所で開催され、踊り連と呼ばれるチームがあしらえた衣装で独自の踊りを披露し、審査員と観客は「おいでんファイナル」へ進むチームを選抜する。そして「おいでんファイナル」において優勝するチームが決定し、盛大な花火も打ち上がる。これらのまつりを主催・運営するのは、豊田市役所産業部商業観光課内に構成された「豊田おいでんまつり実行委員会」である。

「おいでんの湯」における会合の中で、「マイタウンおいでん」の1ヶ所を運営委託されることと、住民による住民のための独自の「おいでんまつり」の開催を目指した。そして組織体については、参加者全員が正業を持っており、多くの時間を割くことが困難なため、寄付を含め協力を仰ぐ可能性のある非営利であるNPO法人を立ち上げる結論に至った。「おいでんまつり」の運営資金については、寄付以外に、「おいでん

ブランド」を名目にタオルやTシャツのデザイン企画・販売を行う予定であった。また広がりを見せれば、参加者が正業としている商品・サービスを「おいでんブランド」として販売していく方向性もあると考えた。そして愛知県に書類を申請し、2010年8月に法務省より認可が下りた。

2) 法人の目的と活動

法人申請に際し、下記を法人の目的とした。

この法人は、三河地域の企業や市民に対して、イベント催行・地元産品開発に関する事業を行い、地域文化と経済に寄与することを目的とする。

- ・豊田市を中心とする三河地域に住む方々が、毎日幸せを実感できるように尽くすこと。
- ・豊田市を中心とする三河地域の地域文化・商品・サービスが、全世界で求められるようにすること。
- ・豊田市を中心とする三河地域の人々・企業等の組織がこの法人を通じて良きパートナーとなること。

また、人事構成については「マイタウンおいでん」の1ヶ所を運営した経験があり、「おいでんまつり」に思い入れが深い、安本和外氏が理事長となった。また、踊り連の責任者を務め、「おいでんまつり」に参加経験豊富な、須田広志氏が副理事長となった。筆者は理事となったが、残念ながら浅野真支配人は病が悪化し、構成人員から外れた。そして賛同した正会員14名²¹⁾が参画し、「NPO 法人おいでん」は立ち上がった²²⁾。

第一回目の活動は、認可前に「NPO おいでん」として2010年4月4日豊田市前田町にて「おいでんまつり」を独自開催した。2010年6月19日は、「豊田おいでんまつり実行委員会」から委託され、豊田市前田町にて「マイタウンおいでん」を運営することができた。2010年8月に法人の認可が下りてからは、毎週木曜日に豊田市「市民活動センター」の1室を借りて会合を開き、どのような取り組みをしていくか話し合った。その後、正会員の会費を資金源に、作成したロゴの入ったステッカーやタオルをつくって販売していった。

その後、「NPO 法人おいでん」として 2011 年 4 月 3 日豊田市前田町にて「おいでんまつり」を独自開催した。1000 人を超える集客を達成することができた。また、2011 年 5 月 29 日は、豊田市が主催する「おいでんふれあいフェスタ」に参加し、「ひまわり商店街」の区画において興行することができた。さらに、2011 年 6 月 18 日は、「豊田おいでんまつり実行委員会」から委託され、豊田市司町にて「マイタウンおいでん」を運営することができた。当日は、橋本舞子さんをステージに招き、生ライブ演奏による踊りができるとあって、集約数は 2000 人を超え、成功裏に終えることができた。

2011 年 9 月 1 日現在、正会員は 18 名となり、賛助会員²³⁾は 25 名（会社組織含む）となっている。

3) 大学との連携

筆者の目的は、「おいでんまつり」による地域活性化の他に、学生が地域で活躍できる機会と場所を見出すことであった。学生が地域の人々との交流において主体的に参画し、地域の中で考えや企画を実現できる教育現場を開拓したいと考えていた。その中心になったのが筆者の総合ゼミナール、つまりゼミ活動である。本学本学科におけるゼミは、2 年生からの一年間のゼミ活動であり、就職含め進路指導もあり、週 1 回の授業ではそれほど多くの活動が可能なのではない。しかし、ゼミのカリキュラムにおいて、「おいでんまつり」への参画を明記し、前期の中心は「おいでんまつり」と位置づけ、毎回ゼミにおいてディスカバージョンの DVD を用いて踊りの習得を行った。

最初、学生達は受動的であったが、豊田市出身の学生が旗振り役となって、徐々に地域と関わることに興味を持つようになっていった。さらに、「NPO 法人おいでん」がどのように収益を上げていくかをビジネス関連を担当する筆者のゼミらしく、マーケティング視点で考えたり、「おいでんまつり」の開催に際し、どのような広告・宣伝が有効で、どのような催しが考えられるかを話し合った。2010 年 4 月 4 日のみは学生の自主参加としたが、それ以外はゼミとして全員参加を基本とした。また、当日まつりに参

加するのみではなく、常時開かれている毎週木曜日に開催される会合にも学生は時々参加し、アイデアを述べたり、NPO 法人のスタッフと関わり、交流とともに活性化に寄与してきた。

最も大事な視点は、どのようにしたら住民の方に楽しんでいただけるか、また収益として法人が黒字となるかである。それを企画段階から携わり、地域の人々とコミュニケーションしていく中で実現していく醍醐味は、学生にとって大きなものであったろうと推測できる。

学生の参加は、NPO 法人側からみてもメリットが大きいものであった。若いスタッフの数が増えたことはもちろんだが、積極的な意見や行動によって活気をもたらし、地域と大学が一体となった場を形成することができた。学生側からすると、地域やそこに住む人々と関わり社会貢献ができたことに加え、就職に向けてアピールする材料の一つとなった。

結論として、地域を活性化するには、けん引していくリーダーである社会起業家とそれを応援していく組織的取り組みが必要である。利益を第一とすることなく、惜しみなく地域と住民に貢献する多くの人材が必要である。また、地域に密着した大学は、積極的に地域の人々と関わり、活性化する取り組みを推進すべきである。そして教員自身が、地域と大学のよりよい未来のために、学生が主体的に参加できる機会を開拓すべきであると考えている。

5. おわりに

実際の事例として、教員の働きかけによる場合と、社会制度を利用する場合と、地域による働きかけの場合の 3 つを扱ってきた。教室から離れることや外部の人材を授業に参画させることだけが教育効果を上げるわけではないが、取り組みのどれもが、単にテキストを理解する以上の教育的効果を生んできたのではないかと考えている。

教育手法として、学生が能動的に考えて行動するステージを用意することためには、地域と連携することが現実的な手法の一つである。地域の中に大学はあり、地域の発展とともに大学の発展も範疇としてあるからである。本取り組みのみならず、本学においても、他大学におい

でも地域連携は実践されているし、これからは取り組まれていくだろう。その時の課題のひとつは、その成果をどのように認識するかということである。教育という成果を数値化しにくい領域において、学生アンケートの統計学的処理のみではなく、大学や地域が評価しうるものを設けることが重要だと感じる。それは、自己満足に教育を終わらせないためという理由もあるが、成果を検証しさらなる効果的な教育を積み上げていくためにも必要であろう。

学生はこれらの取り組みを通じて、自ら考え行動したことによって得られた学びにより、今後どのように地域と共に生きていくのか、どのような仕事に携わっていくのかという問いに向き合うことができたのではないかと考える。学生通しの組織的な学び、地域とのネットワークによる学びを促進していく中で、学生は取り組みを通して自ら自身を認識することが重要ではないかと考えている。今後もそのような教育カリキュラムを考案し実践していきたい。

これらの取り組みの中で、学生以上の失敗と困難を経験したのは筆者に他ならない。学生のチームが分裂しかけたり、単位を楽に取得したい学生にこの負担ある取り組みを理解してもらえなかったり、その他、様々なことがあった。しかし、この取り組みによって筆者自身が地域そのものと、また地域の方々と交流し、ますます大学から地域を活性化する取り組みを発信していこうと考えるようになった。

最後に、本学の教育に理解を賜り、快く無私の精神を示し、行動して下さった多くの方々に感謝を述べたい。そして、このような教育を容認してくれた本学に感謝を述べたい。

1) 内閣府は2001年に「都市再生本部」を発足している。その目的は以下のように述べられている。「地域を教育のフィールドとして活用することにより、特色ある実践的・効果的な教育を行うことができます。大学自身が地域に支えられる存在であり、地域社会の活性化は大学の活性化のためにも必要といえます」。つまり、地域と大学の相互的発展を目指すことが国家的課題として掲げられている。(引用：
<http://www.toshisaisei.go.jp/03project/dai10/network.html> 2011年6月10日アクセス)

2) 本学では、創設者が重視した「真心・努力・奉仕・感謝」の精神を重視し、潜在能力を限界まで引き出す教育

を目指している。

3) 詳しくは下記を参照。拙著(2010)「国家的人材育成の取り組み-起業家教育を中心に」『中京経営紀要(10)』、中京大学大学院経営学研究科、pp.99-119

4) 経済産業省では、大学を対象に2008年より「社会人基礎力育成グランプリ」を開催している。2008年の大賞は山梨学院大学、準大賞は愛知学泉大学であり、PBLによる取り組みであった。

出典：経済産業省(2008)『今日から始める社会人基礎力の育成と評価-将来のニッポンを支える若者があふれ出す!』

5) スイスの調査研究機関「国際経営開発研究所」の調査では、我が国は大学教育が経済ニーズにあっていないという結果であった。出典：国際経営開発研究所(2005)『世界競争力年鑑』、p.603

6) 筆者が2010年4月に、合計861名(大学生275名・短大生586名)に行行った調査の中で、「正しい答えを教えられる教育よりも、自分で答えを見つける教育が重要である」(Q15)という設問に対する結果である。

7) 生活デザイン総合学科は160科目を超える授業を、学生がカフェテリア履修するカリキュラムを整えている。その中の「情報・オフィスフィールド」の中の「ビジネススタディユニット」には、「経済のしくみ」「マーケティング」「企業と社会」「起業・経営演習」「簿記演習」が開講されている。

8) カリキュラムの体系は本学サイトを参照。

<http://www.gakusen.ac.jp/t/jyukensei/gakka/sogo/curri.html> 2011年6月10日アクセス

9) 川口直子・水口美知子・平田 祐子・河野篤・寺島雅隆(2009)『これだけ知っ得! 身につけ得! 一企業が求める常識とマナー』、東京法令出版

10) 社会人基礎力は大きく3つの能力区分に分かれている。それは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」である。それぞれその中に、「主体性」「働きかけ力」「実行力」(以左「前に踏み出す力」)、「課題発見力」「計画力」「創造力」(以左「考え抜く力」)、「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」(以左「チームで働く力」)の12要素が存在する。

11) 豊田綱領は以下の通り

- 一、上下一致、至誠業務に服し産業報国の実を挙げべし
- 一、研究と創造に心を致し常に時流に先んずべし
- 一、華美を戒め質実剛健たるべし
- 一、温情友愛の精神を發揮し家庭的美風を作興すべし
- 一、神仏を尊崇し報恩感謝の生活を為すべし

出典：トヨタ自動車(2003)『Environmental & Social Report 2003』トヨタ自動車株式会社環境部、p.4

12) そのサイトは以下である。

<http://terashima.in/gakusen/cgi/epad1/epad.cgi> 2011年6月10日アクセス

13) そのサイトは以下である。

<http://www.gakusen.ac.jp/faculty/terashima/> 2011年6月10日アクセス

14) そのサイトは以下である。

<http://terashima.in/gakusen/cgi/epad4/epad.cgi> 2011年6月10日アクセス

15) 大学・大学院起業家教育推進ネットワークは経済産業省が大学及び大学院の起業家教育を促進・拡充するために設置された。そのホームページである「起業家教育ひろば」は経済産業省委託をうけて平成21年度産学連携人材育成事業（起業家人材育成事業）の活動の一環として開設された。

16)

<http://www.jeenet.jp/category/visitinglecturerprogram/kougi/> 2011年6月10日アクセス

17) 月刊レジャー産業編集部（2009）「豊田挙母温泉おいでんの湯 浴槽内に投入した運動マシンが人気」『月刊レジャー産業資料』6月号 no.513、総合ユニコム、pp.65-67

18) 豊田市役所総務部広報課（2001）『豊田市制50周年記念誌 新・豊田物語』、p.42

19) 成り立ちの詳細については以下を参照。杉本慎伍（2005）「豊田市、おいでんまつりとその文化の歴史」『コミュニティ』第8号、愛知学泉大学コミュニティ政策研究所、pp.78-84

20) 豊田市観光協会のホームページより歌を視聴できる。
<http://www.citytoyota-kankou-jp.org/> 2011年6月10日アクセス

21) 本学の川口直子教授も正会員として参加した。

22) 活動詳細については公式サイトを参照。

<http://oiden.in/> 2011年6月10日アクセス

23) 賛助会員は、総会議決権を持たない会員であり、法人の会員も存在する。